第２章　旧川越織物市場の歴史的価値と保存・再生に向けて

旧川越織物市場とは（参考文献１－７）

「旧織物川越市場」は明治４３年、織物産業において、関東平野中心部川越の地位向上を目指して、旧鉄砲町（現松江町２丁目）に建造されました。組合設立に関与した33人の町人のなかには、一番街に現存する蔵造り・店倉を建造した豪商も数多く含まれます。織物市場と川越一番街との深い関係が偲ばれます。この地は、旧川越市街地の南に隣接し、現本川越駅、チンチン電車：久保町駅への交通の便も想定して建設されたものと思われます。

「川越織物市場」は広い中庭とそれを挟んだ東西２棟の町屋風長屋から成っています。東棟は１０間口と組合事務所、西棟は１２間口からなり、各間口に１店舗が入りました。各間口は、１階が店舗、２階が倉庫として使われました。その活気ある様子は、古写真や市立博物館の模型展示での人物の表情から十分に感じ取ることができます（参考文献１）。模型のみならず、その建築物がほぼ現存しています。

一方、「旧川越織物市場」に通じる立門前からの路地には、時代を感じさせる３棟の木造建築が残されています。これらのうち、１棟は当時の織物市場に出入りする人々への食堂として利用されていました。「栄養食配給所」という時代を感じさせる建物が残り、ここは、織物市場廃止後も、戦中戦後の配給所として用いられてきたとのことです。織物市場のレトロ感を否応なく高め、戦前に誘うタイムマシンのようです。

なお、関東各地に開設された織物市場建築（たとえば、東京都八王子市、群馬県桐生市、栃木県足利市など）はすでに失われています。一例として、群馬県桐生市では、川越が範を求めた織物市場（第一物産売買所）が明治１６年に設置されました。現存する「川越織物市場」と見まがうばかりの古図が伝えられています。当地においても、解体を免れたわずか１間口分が改築されながらも住居として残されているのみです（参考文献８－１０）。「川越織物市場」が奇跡的に残ったその価値を痛感させられます。

「旧川越織物市場」のその後と、保存再生に至る経緯：

「川越織物市場」は、活況を呈しましたが、その後浮き沈みを繰り返し、ついに大正末期には、終焉を迎えました。一説には、他織物産地が高級化・機械化を図ることにより生き残りに成功したのに対し、川越では、依然として手工業的状況から抜け出すことができずに、時代から取り残されたとのことです。しかしながら、その後、川越織物産業が衰退したこと、「織物市場」建築が住居として利用されてきたことにより、織物市場建築が奇跡的に現代まで生き残ったと言われています。また、居住者、建物権利者、地権者の権利関係が複雑なことも解体を免れてきた原因と考えられます。

ところが、この権利関係の複雑さが、いざ文化財として保存するとなったときには災いしたとも聞いております。今回は、この複雑な権利関係がマンション業者に１本化しています。最後の機会とはなりましたが、言いかえれば、保存に向けた機が熟したとも言えます。わたしたちが、今回、文化財保護を目的として活動を開始できましたのも、「織

物市場」が地元地権者の手を離れたこと、マンション建設のために解体される危機に瀕し、不肖遅れ馳せながら川越の文化・歴史・地域環境の保全へ住民の果たすべき役割に気づき、思いを熱くしたことによります。

「旧川越織物市場の保存・再生を考える会」を、「松江町２丁目自治会」、「川越蔵の会」、「立門前商栄会」、「川越唐桟の会」を発起人として設立いたしました。その活動は広く、新聞各社により、埼玉県内のみならず、関東各地に配信されています（１１）。私たちの活動は、今回の「織物市場」の保存再生のみならず、小江戸川越を愛するものの使命として、今後も歴史文化の誉れ高き川越をまもっていく大きな運動として育てていきます。

この章のおわりに：

「川越織物市場」設立は、当時、市長の諮問により開始されましたが、実際の建造・運営には、民間団体：織物共同組合があたったという経緯があります。いま、織物市場の保存再生という新しい出発にあたり、行政と私たち市民が手を携えてその任にあたることは、その創設時より課せられた「川越織物市場」の使命であるともいえます。私たちは、近代化遺産として最もふさわしいといわれる「旧織物市場」を後世に伝えることへ参画できますことを祈念します。また、保存・再生を勝ち得た川越市民として、小江戸の粋と文化を多くの訪問頂く方々に存分に堪能いただく手助けができますことを祈念します。この活動は小江戸川越の歴史の１ページです。

〈参考資料：２章関連〉：

（１）川越市立博物館　常設展示図録　2000 年版　118-121 ページ
ホームページ：http://www6.ocn.ne.jp/%7Ekawahaku/hakubutukan-1.htm
（２）埼玉県近代化遺産調査報告書　1996 年、埼玉県教育委員会
川越市の調査例 67 件のうち、産業商業分野の筆頭。
名称：川越織物市場　所在地：川越市松江町２丁目－１１－10
分野：産業　種別：商業
竣工年：明治４３年　主な材質：木
概要：明治時代の市場建築で,旧状をよくとどめる。この種の建築では関東唯一の残存例。一部を住宅に改造。
「（６９ページ）明治４３年、旧鉄砲町に建てられた旧織物市場は、織物取引のための市場建築としては関東地方でただ１つ残存するのものである。明治末年にかけて、綿織物類の集散で新興の所沢におされつつあった川越商人たちが、勢力挽回を記して共同で設立したという経緯をもつ。風雪に絶え,閉鎖後は集合住宅として再利用されることで解体を免れている。この貴重な市場建築は川越の近代化遺産としてもっともふさわしいもので、なんとかして歴史的町並みの一員にくわえ、織物資料館のような施設として再生できないものか。」

（３）かわら版川越唐桟　第１４号　平成１３年３月発行
川越蔵の会ホームページに転載：
http://www1.odn.ne.jp/~kuranokai/orimono/index.htm
（４）川越市史
（５）第２回企画展：写真展　明治・大正・昭和の川越　川越市立博物館　1990 年
（６）埼玉ふるさと散歩：川越市　新井　博著、さいたま双書　平成４年
（７）わが町川越歴史散歩ー小江戸の残照　小泉　功　ルック　1995 年
（８）桐生市史　中巻　昭和 34 年
（９）思いでのアルバム桐生　1982 年
（10）桐生本町の町並み　1994 年
（11）朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞　2001 年 11 月 10 日（土）

コメント：
（A）市政への提案からの回答：
「旧織物市場」につきましては、産業遺産としてあるいは市場建築としての稀少価値はあるものと理解しております。」
（B）埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課
「本日、川越織物市場についてメールを受け取りました。この件につきましては、川越市教育委員会に現状を問い合わせております。」

第３章　現状の課題と問題点

『第１章　川越市の現状認識』『第２章　川越織物市場の歴史的価値と保存・再生に向けて』を受けて、川越市の現状の課題と問題点について、市レベルと旧川越織物市場の位置する松江町２丁目や、立門前商栄会等周辺地域（以下、当該地域という）から見た視点で整理すると以下のとおりとなります。

３－１　市レベルから見た視点

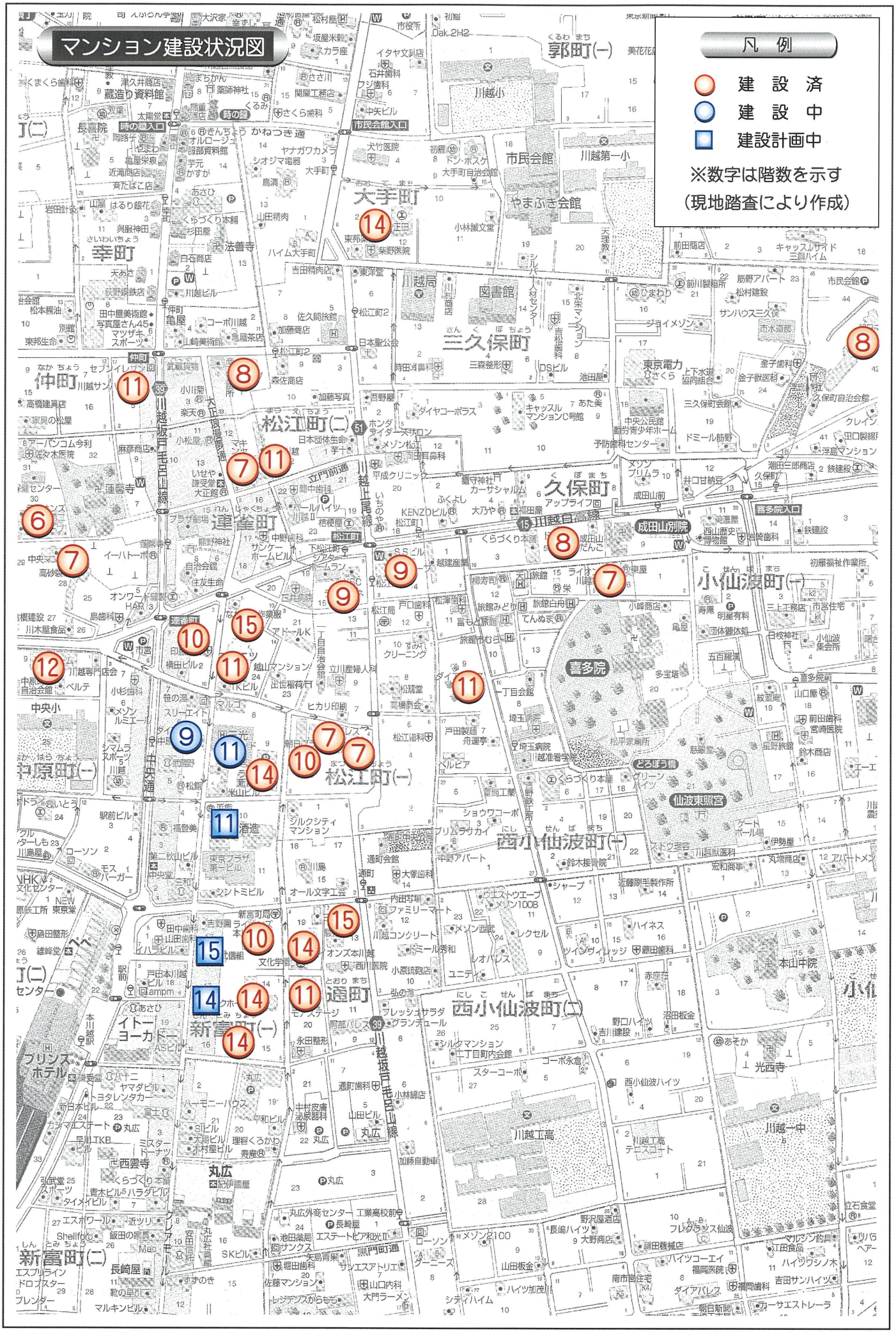
・川越市は、歴史的資源を再生・活用し商店や事業者との連携により、着実に観光都市としての成長を遂げているものの、年々増加する観光客に対する受け入れ体制は必ずしも十分とは言えません。例えば、安心して町並み散策やショッピングを楽しめる道路空間や、休憩施設、公衆トイレ、ポケットパーク等の整備、観光案内所等のサービスの充実等が求められています。

・自動車を利用した観光による交通渋滞への対応としてのパーク＆ライド、パーク＆サイクルライド等の推進が求められています。

・観光客の主な流動は、主に本川越駅方面から蔵造りの町並み、時の鐘等を結ぶ中央通り（県道川越坂戸毛呂山線）ルートや、喜多院方面から蔵づくりの町並み・菓子屋横町方面へ向かうルート上の県道川越上尾線、そして川越駅からのクレアモールの３つの南北軸に集中していますが、その延長上にある大正浪漫夢通りには必ずしも多くの観光客等は見られず、連続性の強化が求められています。また、東西軸は県道日高線と佐久間旅館と仲町の交差点を結ぶルート、市役所前と札の辻交差点間に集中し、他の東西軸は極めて弱く、これらの商店街の活性化が問題であります。

・川越市の総合計画をはじめとする各種上位計画等の中で、『歴史のまち・歴史と伝統を大切にするまち・歴史的な建造物等を生かしたまちづくりなど』が示されていますが、急速に進む市内のマンション建設とあわせて、本市の貴重な資源である歴史的町並み景観をどのように考えていくのかが今後の大きな問題であります。

マンション建設状況図


凡例
建設済
建設中
建設計画中
※数字は階数を示す
（現地踏査により作成）
郭町(一)
大手町
幸町
仲町
三久保町
松江町(二)
連雀町
久保町
小仙波町(一)
喜多院
中原町(一)
松江町(一)
西小仙波町(一)
通町
西小仙波町(二)
新富町(一)
新富町(二)
川越工高
川越一中
光西寺
本山寺院
丸広
市民会館
川越第一小
やまぶき会館
図書館
川越局
東京電力
成田山別院
川越自高線
川越坂戸毛呂山線
川越上尾線
時の鐘
時の鐘入口
市民会館入口
仲町
連雀町
喜多院入口
どろぼう橋
仙波東照宮
中央小
川越工高テニスコート